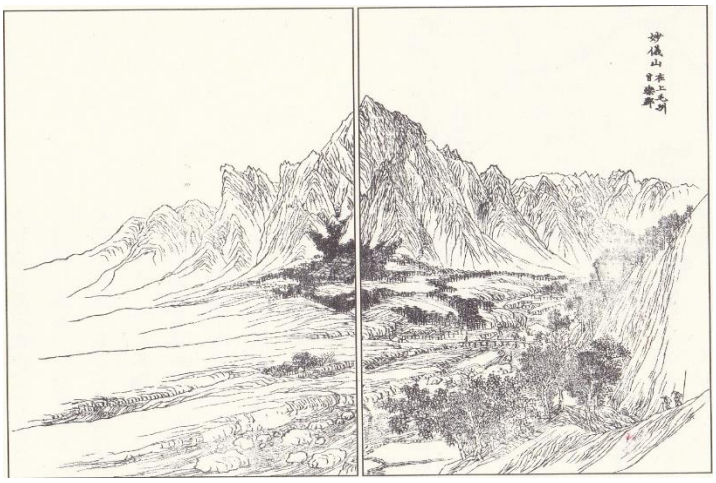
(1)『日本名山圖會』（谷 文晁 著）　　(2)『現代日本名山圖會』（三宅 修 著）

登山という営為には三ツの楽しみがあると言われている。一番目は、登る山の選択から始まってルートなどの研究や諸準備、即ち登山計画書作成までの段階である。二番目は実際の登山そのもの、三番目は登山が終わった後での記録の作成や写真、スケッチなどの整理などであろう。

その内に年齢を重ねて段々と現役から離れてくると、昔歩いた山々の追憶に耽ることが増えてくるようになる。馬齢を重ねて八十路の峠を越えた小生は山は山でも超低山の里山、ウラヤマ、ボタ山でさえ足がストライキを起こすようになってきたし、また、テレビ番組の視聴では海外高所登攀やロングトレイルなどのハードな番組よりも酒場詩人・吉田類の「日本百低山」などの番組の方に目が行くようになってきた。

マ、ＴＶ番組のことは兎も角、追憶ジジイになって、昔辿ったあの山この沢その壁などを忘却の彼方から呼び戻して追憶に耽るのは四番目の楽しみとも言えようか。余談であるが、絶好の釣り日和である雨の日に書斎に籠って安楽椅子などに身を任せながらウィスキーなどをチビチビと嘗めつつ、釣竿や釣針やウキなどの釣り道具をいじくってああでもないこうでもないとウンチクに耽る釣り師のことを“ アームチェア・アングラー”と呼ぶそうであるが、小生も恥ずかしながら“ アームチェア・クライマー”の口になって久しい。

扨て、左様な興趣の一助となる本を紹介したい。一つは江戸時代に刊行された『日本名山圖會』である。江戸画壇の重鎮であった谷文晁が諸国遊歴中に写生した山々の画譜である。高山あり低山ありの全国 88 座が描かれている。例えば右の画譜は妙儀（妙義）山であり、嶬峨たる岩稜の様子が細かく描かれている。



（「妙儀山」　中央に集落、右下に杖笠の旅人も描かれている）

登山の案内書ではないので、選ばれている山々は現代登山の〇〇名山とは異なる山も多いが、往時は諸国漫遊の景勝地だったのであろう。当時でも道中記や紀行文には庶民の人気があって、諸国の名山を眼で見るこの本はベストセラーになったそうだ。描かれた景観はデフォルメされているものも多いが、もし自分が登った山であれば山容や稜線や谷筋などを比定しながら自分が実際に歩いたルートを絵の上で辿ってみるのも一興ではなかろうか。江戸時代の旅人になったようなホンワカとした気分になってくる。

実は、40 年間の歳月を掛けて自分の足で文晁描く全 88 座全ての比定を行った人が居て、写生場所を推定し、同じ地点から写真と文章で文晁の山を改めて再現して見せて呉れたのが山岳写真家・三宅修著『現代日本名山圖會』である。写生地を特定するには相当な手間暇を掛けられたと思うが、お蔭で机上で現代の諸国漫遊の旅を楽しむことが出来る。

何れも古い本なので、図書館か古本屋で探すしかないが、2 冊並べて読まれれば一層興趣が湧く。

「日本名山図会」谷 文晁著　国書刊行会 1970 年刊、4,800 円　（国書刊行会版では圖會が図会）

「現代日本名山圖會」三宅 修著　実業の日本社 2003 年刊、5,028 円　　（酎　2024 年 10 月記）